

「史多墓誌」に関する一考察

森 部 豊

A Study of Shi Duo's Epitaph

MORIBE Yutaka

Shi Duo's epitaph was found at Luoyang, Henan province, China in 2009. This epitaph brought a lot of information about Sogdian and Turk during Sui and Tang periods. About the epitaph Prof.ZHAO Zhenhua and Prof.FUKUSHIMA Megumi regarded Shi Duo (史多) as Sogdian. In contrast I will hypothesize that Shi Duo is Turk.

キーワード：史多、西突厥、ソグド

はじめに

唐代に活躍したソグド系武人について、従来、唐の建国および安史の乱、その後の河朔三鎮の半独立割拠、唐末の沙陀族の興起に大きく関与してきたことが指摘されてきた〔小野川秀美1942〕〔Pulleyblank1952〕〔山下将司2004・2005・2011・2012〕〔森部豊2010〕。このうち、唐初に活動したソグド系武人の淵源は、山下によれば、北朝時代にソグディアナから中国へ移動し定住したソグド人の子孫と考えられている。一方、小野川やPulleyblank、そして筆者は、安史の乱以降に顕在化するソグド系武人は、東突厥の崩壊によって生み出された突厥遺民の中にいたソグド人（ソグド系突厥）が主たるものであったと考えている。

これまで、唐代のソグド系武人の系統に関する認識は、おおむね、上述の二つのパターンに分けられ論じられてきたが、この見方に対し、唐後半期に活躍するソグド系武人の中に、ソグド人植民聚落を拠点とし、交易活動に従事していたソグド人も含まれるという新しい見解が提示された。この考え方は、福島恵〔2013〕が、2009年に公表された「史多墓誌」の分析を通じて提出したものである。「史多墓誌」は、洛陽在住研究者である趙振華〔2009〕が、はじめて紹介、解釈したものだが、本論で示すように、趙振華および福島の「史多墓誌」に対する解釈には疑問な点もある。

この小論は、ソグド系武人の種別・系統を分析しつつ、将来的に唐代における蕃将研究の全体像をえがこうとする予備的作業の一環である。そのため、福島が提起した「第三のソグド系武人」を再検討し、それが妥当なものであるのか検証しておく必要がある。

そこで、まず「史多墓誌」の全容とそれに対する趙振華と福島恵の解釈を紹介し、問題の所在を明確にする。そして、それに対する筆者の解釈を提示していくものとする。

1. 「史多墓誌」

1.1 「史多墓誌」概略

「史多墓誌」は、趙振華 [2009] によってはじめて紹介され、その後、齊運通編『洛陽新獲七朝墓誌』[中華書局、2012年、171頁]と趙君平・趙文成編『秦晋豫新出墓誌蒐佚』[国家図書館出版社、2012年、465頁]に拓本が収録された。趙振華 [2009] では、「史多墓誌」の出土年および出土地を不詳としているが、『秦晋豫新出墓誌蒐佚』のキャプションにより、2009年春に河南省洛陽市龍門鎮で出土し、現在、その原石は個人が所蔵することが明らかになっている。

「史多墓誌」は一辺46cm、厚さ10cmで、楷書体で22行、一行あたり22字が刻され、全446文字からなる墓誌である。墓主の名は史多といい、本貫は「西域の人」と記される。開元六(718)年十月二十六日に101歳で没しているので、生まれは唐建国の年、618年となる。

以下、『洛陽新獲七朝墓誌』所載の拓本写真にもとづき墓誌の釈文をし、本論の行論の参考として、訓読を付す。なお、紙数の都合で現代語訳は省き、訓読の中で、その一部に説明を加えた。

1.2 釈文

【凡例】■……空格 □……判読不能 北……拓本から判読できないが類推可能

- 1 大唐故冠軍大將軍史^北勒墓誌并序
- 2 公諱多、字北勒、西域人也。建土鹿塞、代貴龍庭。交贊往来、
- 3 書于曩策。公其後也。曾祖達官、本蕃城主、自天縱知、神朗
- 4 宏達。不由文字、晤暗古今。率彼附容、遠欽■皇化。祖味嫡
- 5 襲、不墜忠貞。父日、夙使玉關、作鎮金塞。乃礼遣長子削衽
- 6 來庭。公之是也。公至、自皇上嘉其誠款、特拜授中郎將。自
- 7 參侍丹墀、綿歷年祀、嘗無纖犯、聲譽日聞。又加冠軍大將
- 8 軍、進位上柱國、轉右領軍衛中郎將。擁虎^賁之^之猛士、警翼
- 9 皇圖、運豹韜之奇籌、殄摧匈寇。公素知止足、不尚矜華。謝
- 10 病丘園、甘寢私第。歲時月見、二三而已。谷神不死、徒着五
- 11 千之賢、聖□歸終、化一棺之土。以開元六年十月廿六日
- 12 薨於里第、春秋一百一。七年四月十五日遷厝於洛陽城
- 13 南、礼也。其處則邇接華陽、依紫微於北極、俯臨伊渚、奇瑋
- 14 控於南山。瑞則仙鶴吊人、圖則神龜占地。絕漿哀子、痛甚

- 15 曾參。樹劔良朋、悲深吳礼。沿茲銘典、以勒泉門。翼播金聲、
16 永存玉策。其詞曰、■■惟德動天、無遠不届。赫々宗唐、四
17 方是拜。英々公族、則為蕃首。聲聞中華、威振細柳。粵自龍
18 庭、入侍鳳闕。削衽拖紳、解辮冠髮。翼々警衛、臺々歲月。忠
19 懇日聞礼數時越。功踰衛霍、績出韓彭。玉門擁節、金嶺麾
20 旌。不尚矜華、屢乞骸骨、謝病歸家、星離寡留。日逗纖隙、人
21 生斯須。忽如過客、霧歷草隧。蕭瑟風柏泉路、一分幽明永
22 隔。名冀与兮天壤俱、雕茲石兮勒銘策。

1.3 訓読¹⁾

【凡例】〔 〕……筆者補字。()……筆者注

大唐の故冠軍大將軍史北勒の墓誌並びに序

公の諱は多、字は北勒、西域の人なり。土に鹿塞さかもぎを建て、代々龍庭に貴し。贄おくりものを交わして往来し、曩策のうさくに書さる。公は其の後なり。曾祖の達官、本蕃の城主たり。天より知を縦ゆるされ、神郎にして宏達なり。文字に由らずして、古今かしこを暗そらんず。彼の附容弱小国を率い、遠く皇化あおぎしたを欽うう。祖の昧、嫡襲し、忠貞うしなを墜おとしわず。父の日、夙に玉関にしのとりでに使いし、金塞ちんじゆに作鎮せられる。乃ち礼して長子ようやくを遣りて削衽して来庭せしむ。公、之れ是なり。公至るや、皇上の其の誠款を嘉するを自もつて、特に拜して中郎将（正四品下）を授けらる。自ら丹墀宮中に参侍し、年祀を歴綿して、嘗て纖犯も無く、聲譽は日々聞こゆ。又、冠軍大將軍（武散官・正三品）を加えられ、位を上柱国（勲・正二品）に進められ、右領軍衛〔翊府〕中郎将に転ず。虎贄の猛士を擁し、皇圖唐 朝を警翼し、豹韜の奇籌を運らし、殄ことごとく匈寇突厥の侵攻を摧く。公、素より止足を知り、華を矜るを尚おぼはず。丘園に謝病し、私第に甘寝す。歳時、月見ること、二三のみ。谷神は死せず、徒だ五千の賢を着す。聖□歸終、一棺の土と化す。開元六（718）年十月廿六日を以て里第に薨る。春秋一百一。七年四月十五日、洛陽城南に遷厝す。礼なり。其の処は則ち華陽に迎接し、紫微を北極に依る。俯して伊渚に臨み、琇控を南山に寄る。瑞は則ち仙鶴、人を吊い、凶は則ち神龜、地を占う。絶漿の哀子、痛ましきこと曾參より甚だし。樹劔の良朋、悲しみは吳礼より深し。茲の銘典に沿い、以って泉門に勒す。金声を翼播し、永く玉策に存つ。其の詞に曰く、惟れ徳は天を動かし、遠く届かざるもの無し。赫々たる宗唐、四方是れ拜す。英々たる公の族、則ち蕃の首と為る。声は中華に聞こえ、威は細柳に振う。粵に龍庭自り、入りて鳳闕に侍す。削衽して拖紳し、辮を解き髮を冠す。翼々たる警衛、臺々たる歲月。忠懇日ごと聞こえ、礼数は時に越ゆ。功は衛霍を踰え、績は韓彭に出ず。玉門、擁節し、金嶺、麾旌す。華を矜るを尚おぼはず、屢しば骸骨を乞う。病

1) 訓読にあたっては、福島 [2013] を参照した。ただし、福島と読み方の異なる部分、釈字の違いもある。例えば、福島は史多の父を「史曰」と釈字するが、筆者は趙振華と同じく「日」字をとる。

を謝して家に帰り、星離、留すこと寡し。日の逗ること織隙にして、人の生や、斯須たり。忽として過客の如く、草隧を羃歴す。蕭瑟たる風、泉路を柏し、一たび幽明を分たば永に隔たらん。名は冀与して天壤は俱にし、茲の石に雕みて銘策を勒す。

2. 「史多墓誌」の解釈をめぐって

2.1 趙振華の解釈

まず、趙振華〔2009〕の解釈から検討していきたい。趙振華は、当該墓誌の墓主が「史」姓を持つこと、また「史多」の「多」はソグド人名に散見される名前であることを指摘する。²⁾ また、史多の本貫は、墓誌では「西域人」と記していることに着目し、他のソグド人墓誌に「西域康国人」「西域米国人」³⁾と記されることをふまえ、史多は中央アジアの「昭武九姓人」でソグディアナに定住していた家系であると指摘する。趙振華は、史多の本来のソグド名は漢文墓誌の諱と字を組み合わせた「史多北勒」とであると指摘するが、これは傾聴に値する。ただし、この「西域人」を称する史姓の人物を、すなわちソグド人とみなしていいのかわ、疑問が残る。

つぎに、墓誌文の「建土鹿塞、代貴龍庭」の表現であるが、これは隋の煬帝が大業三（607）年に陝西北部から山西北部を巡幸し、東突厥の啓民カガンの居るところに至り、カガンが煬帝の長寿を祈ったことに対し、喜んで歌った詩の「鹿塞鴻旗駐、龍庭翠輦廻。氍帳望風舉、穹廬向日開（鹿塞に鴻旗が駐り、龍庭に翠輦が廻る。氍帳は風に望んで挙げられ、穹廬は日に向かって開いている）」〔『隋書』卷84「北狄伝」突厥条、1875頁〕を踏まえた表現である。趙振華は「鹿塞・龍庭を以てソグドの都市国家を指し示す（以鹿塞・龍庭指代粟特城邦）」と解釈するが、これは唐突すぎて全く理解できない。

ついで、曾祖父の「史達干」の解釈を示す。趙振華は、「達干」は「突厥可汗之下的首領」であり、もとは柔然の重要な「官号」であるが、その後、突厥やウイグルに受け継がれ、またソグドもこれを用いたとする。その根拠として、「唐游撃將軍史諾匹延墓誌」⁴⁾に「祖父西蕃史国人也。積代英賢、門称貴族、本郷首望、総号達干」とあることを挙げ、ソグド人貴族の間で「達干」の称号が用いられていたとする。そして、この史達干は、史国王の史狄遮が大業十二（616）年に隋に朝貢した際に随行し、中国とよしみを通じた、と解釈する。趙振華は、史多の没年から計算して、曾祖父の史達干の活動年代を推測しているが、後述のように、史達干の活動の下

2) 趙振華は、2004年に西安から出土したソグド人墓誌である「北周涼州薩保史君墓誌」に、墓主の第三子の名が「富□多」と見えることを挙げ、また寧夏回族自治区固原で出土した史氏一族の墓誌の記述に見える「史多」（史索岩の父。史道德の祖父。史索岩および史道德はそれぞれ墓誌が発見されている〔羅豊『固原南郊隋唐墓地』、文物出版社、1996年〕）の事例を挙げている。

3) 「西域康国人」は「康阿達墓誌」〔周紹良編『唐代墓誌彙編』、上海古籍出版社、1992年、貞観182、124頁〕、「西域米国人」は「米継芬墓誌」〔周紹良・趙超主編『唐代墓誌彙編續集』、上海古籍出版社、2001年、永貞003、796頁〕に見える。

4) 毛陽光2006ではじめて紹介された。

限は文帝の時期に相当するので、史達干が煬帝の時に中国と好を通じたという趙振華の解釈は成り立たないだろう。

ついで、趙振華は「質子」の問題を取り上げる。趙振華は、唐代では周辺諸国の有力者が王子や世子を唐に人質として送って忠誠を示し、唐朝は彼らを侍衛武官とした事例に即し、史多の父が唐の質子になったと解釈する。その根拠として、墓誌に「父日、夙使玉關、作鎮金塞」とあることをふまえ、これ以前に、史日は、その父の史昧によって唐に質子として送られ、史日はそこで唐の政治制度を学び、儒家文化の薫陶を受けて唐朝の信任と実務能力を得た後、「夙使玉關、作鎮金塞」、すなわち玉門関に赴任し、この地で軍人として駐屯した、という解釈をするのである。そして史日の玉門関赴任に同行した史多は父と同じように質子として長安に赴き、その際、史多は「削衽拖紳、解辮冠髮」、すなわち外域の人が種族本来の服装を変えることで中国と友好関係をむすぶ一種の手段をとったと解釈する。この点、後述の福島が反論するように、史日が質子となったという解釈は、墓誌を素直に読めば、成り立たないだろう。

このように趙振華の解釈は、その立論の根拠が不十分であり、また思い込みによる行論が目立つばかりでなく、墓誌の解釈そのものも恣意的なところがある。

2.2 福島恵の解釈

この趙振華の解釈を批判的にうけとめ、新たな説を出したのが福島である。それに先立ち、福島は、趙振華の解釈に対し問題点を整理し、それに対する検討をおこなった。

まず、史多の曾祖父である史達干が、隋代に城主の身分で史国王の史狄遮に随行し、中国と友好を通じたことについて、福島も趙振華と同じく、史多の没年から計算して、曾祖父は煬帝時期の人なので理解できる、とする。

次に、史日が史国から唐にきた質子であり、史多は二代目の質子だという趙振華の説に対し、反論を加える。趙振華の指摘が正しければ、史日が質子となったのは、史国の朝貢にともなって入朝した可能性が高いと、福島は仮定する。そこで、唐代における史国の入貢を調べると、史国入貢の初見は貞観十六（642）年であることが明らかとなる。福島は「（貞観十六年）当時の史日^{ママ}の年齢は五〇前後だと推測される」ので、この時、史日が質子となり唐朝の制度と儒家文化を体得した後に玉門関へ向かうには高年齢すぎる、とする。また、玉門関赴任に際して、官職名が記されないのも不自然であると指摘する。

また、趙振華が「龍庭」を史国と解釈することに疑問を呈する。史多の祖先は「代々、龍庭に貴たり」（2行目）であり、「粵に龍庭自り、入りて鳳闕に待す」（17～18行）と墓誌に見えるが、その「龍庭」とは、一般には「遊牧民族の王庭」、ここでは突厥カガンの牙帳を指すと福島は指摘するのである。

最後に、福島は史多が「削衽」（左前の襟を取り去ること、転じて胡服を脱ぐこと）、「解辮」（辮髪をやめること）して入朝したことを取り上げる。このことは、非漢人的習俗を漢風に改めて唐への服従を示しているといえる。ところで、趙振華は、史日が唐朝に入朝して質子となり、その

子として玉門関で生まれ育った史多も唐の質子になったとした。しかし、福島は、すでに唐に入朝し、唐の領域内で育った史多が「削衽・解辮」するのは疑問であるとし、趙振華の解釈をしりぞける。

このような趙振華の解釈が出てくる根本問題は、史多を史国出身の質子と解釈することになると、福島は指摘する。さらにつきつめれば、「曾祖達官、本蕃城主」の「本蕃」を「史国」と解釈することに問題があるというのである。

そこで福島は、当該史氏が「『本蕃』から中華王朝への帰属は、曾祖父の達干の時（隋煬帝大業年間）と史多の時（唐太宗貞観年間）」の2回と考え、また曾祖父が帰属した時は（森部注：さらに父の代まで）「本蕃」を離れなかったとする。そして福島は、誌文のいう「本蕃」とは、「『以前は蕃域であった』、つまり「墓誌作成時点に蕃域ではない（＝中華の支配下）」という意味」であり、「史多が「削衽」「解辮」して（＝蕃域での風習を改めて）入朝していることを考えれば、史多の入朝と同時、あるいはその後に唐の支配下になったと推測される」[以上、福島2013、181頁]というのである。

こうして、墓誌作成時では蕃域で無く、それ以前において蕃域だった西方の地点として、福島は「このような「史多墓誌」の記載に合致するものは……天山山脈の東端、カルリク山の南麓に位置する伊吾である。」と推測する。伊吾はソグド人の植民聚落であった。隋の大業初年から数年間は、鉄勒に従っており、大業五（609）年四月に隋に遣使し、六月に献地した。隋朝は同六年、この地に伊吾郡を置いた。隋末の混乱時、伊吾はふたたび「胡」の支配下（福島はこの「胡」をソグド人とする）に入ったが、貞観四（630）年、伊吾の首領だったソグド人の石萬年が唐に降り、唐朝はここに西伊州を置いた。この時、墓主の史多も唐朝へ帰順した、と福島は解釈する。

以上の考察により、父の史日が「玉門関に派遣されたのは、唐の中央からではなく伊吾からの派遣だと理解」[184頁]でき、史日は質子でないから、玉門関に派遣された際の官職名が墓誌に記されないことも問題無くなる。そして、史多が伊吾のソグド人聚落の出身者であり、唐朝の軍人であったことの意味は、従来のソグド系武人の解釈に対し、一石を投じるものになる。すなわち、「唐後半期以降に活躍するソグド武人の中には、ソグド人の植民聚落出身、つまり交易に従事していた者（あるいはその子孫）がふくまれていたことを想定する必要が生じる」「武人として活躍するソグド人であっても、それが全て遊牧文化を身につけた「ソグド系突厥」であったとは限らず、シルクロード上の交易活動に携わるオアシス民が唐に帰附してきた場合にも、武人としてのソグド人の形態はありえた」[186頁]と結論付けるのである。

3. 「史多墓誌」再解釈

3.1 史多はソグド人か？

以上、趙振華、福島両氏の説を紹介してきたが、両氏に共通する前提は、史多はソグド人であるということである。おそらくその理由は、「史」というソグド姓を持つことと、墓誌に「西域の人なり」と記されていることによるのだろう。はたして、この見解に問題はないのだろうか。周知のとおり、唐代の「史」姓には、突厥の阿史那が中原へ帰属した後に名乗る場合もあり、その判断は慎重でなければならない。また、両氏も言及していることだが、「史多墓誌」の誌文の語句には、突厥を指すものが散見される。

このことをふまえ、筆者は、史多の家系はソグド人ではなく、突厥人、もしくは突厥の影響を大きく受けたソグド人であると考えている。それは、以下の理由による。

第一に、墓誌に表現される「代々龍庭に貴たり」の「龍庭」とは、騎馬遊牧民（突厥）の大可汗の王庭（牙帳）を指し、史多の先祖は突厥に従属していたことは明らかである。

第二に、曾祖父の名が突厥の官称号である「達干」だということである。ただし、「達干」の号はソグド人の間でも使われているので、これだけでは突厥人である証明にはならない。また、この「達干」が曾祖父の本名なのか、あるいは彼が帯びていた官称号を名前風にするしているのかは判然としない。

第三に、史多が唐へ入朝する際、「削衽」すなわち胡服をやめ、「解辮」すなわち辮髪を解いたとあるが、これは非漢人が中原王朝へ帰順する際の常套句であり、必ずしもソグド人に限定できず、突厥人と考えることも可能である。

第四とし、史多の名前が挙げられる。史多の字の「北勒」（中古音：puək lək）について、福島は不確定要素が多いとことわりながら、一応、古代テュルク語を想定し、Bäglig（bäg は族長の意味、-lig は—の資格を有する者）の音転写の可能性を示した。しかし、Bäglig を「北勒」と音転写することについて、吉田豊氏の教示によれば、「勒」は後舌の音節を示し、前舌の音節 lig には対応できないので、bäglig 説は成り立たないとのことである。⁵⁾

ところで、趙振華氏は、非漢族が本来の固有名を漢文で表現する際、諱と字に分ける事例を提示し、史多の本名は史多北勒（「公諱多、字北勒」）ではないかと指摘した。そのうえで、趙振華はソグド人名の漢字音写中に「多」が散見されることもあわせて紹介し、史多をソグド人と考える判断材料としている。

筆者は、この趙振華氏の指摘の前半は首肯するが、後半は賛成できない。この史多の本来の名前が「史多北勒」という見方を踏まえ、再度、吉田豊氏に教示をあおいだところ、「多北勒」は、古代テュルク語で「～に仕えている」を意味する「tapaylıy/tapıylıy」がびたりとあてはまる

5) そもそも、福島は、史多をソグド人と想定しているのに、名前がテュルク語であるとする理由は述べられておらず、その根拠は不明である。

いう。また、実際バクトリア語の文書に、ギリシア文字表記を通常の表記に直すと「qutluy tapaylīy bilgā sǎbüg」という名前のトルコ人が現れるという。

吉田氏の教示を受け、改めて漢字で記された古代トルコ人の名を調べてみると、『旧唐書』巻13「徳宗本紀」貞元六年十月辛亥の条に「迴鶻遣達北勒梅録將軍来」と見える。これは古代テュルク語の「tapaylīy/tapīyīy」を音写したものと確認できる。

以上から、史多は、おそらく「阿史那多北勒」と音転写される突厥人、あるいは突厥文化の影響を大きく受けたソグド人と解することができる。

3.2 「西域人」「本蕃城主」の解釈

曾祖父が「本蕃城主」と表現されることから、趙振華、福島の両氏はともに、どこかの城郭都市に居住するソグド人であると解釈し、その城郭都市を趙振華はソグディアナの史国（キッシュ）、福島は伊吾と推定した。ただ、史国にしろ、伊吾にしろ、それらは相当の規模のオアシス都市であり、そうならば墓誌にその名を明記しないほうがおかしいのではないだろうか。墓誌には、「附容（庸）」とあり、これは天子に臣従せず、大諸侯に属する弱小国の意味であるから、史多の祖がいた場所は、唐では名も知られていないような小規模なところだったと考えられる。

墓主の史多は、その名が古代テュルク語で解釈できること、そしてその出自を「西域人」と自称していることから、中原王朝の西方からやってきた者には間違いはない。史多は618年生まれなので、一世代の差を30年で計算すると、おおよその活動時期は、曾祖父の史達干が528年以降、すなわち北魏から隋の文帝期頃まで、祖父の史昧が558年以降、すなわち北齊・北周の並立時期から統一隋の頃まで、父の史日が588年以降、すなわち統一隋から唐初頃までと推測することができる。

趙振華、福島ともに、曾祖父の史達干は隋の煬帝の治世、大業年間に隋へ朝貢したと捉えているが、この点、史達干の活動時期は隋の文帝期までと考えるのが妥当だろう。すなわち、曾祖父の「彼の附容を率い、遠く皇化を欽う」という表現は、史達干の事績というより、古くから中原王朝へ「帰化」する意思があったことを示す墓誌文叙述上の表現形式と解釈すべきである。

また史多が突厥人で、西方にいたことを考え併せれば、その家系は西突厥人であることとなる。曾祖父は、史実であるかどうかは不明であるが、西突厥の「達干」だったという伝承を、「史多墓誌」を製作した史多の次世代の人々は持っていたとみなせる。突厥の「達干」は、可汗の「行政幹部」を形成した官僚であり、吐魯番出土文書から得られる達干（吐魯番文書では「大官」）の情報では、西突厥の可汗から、西突厥の実効支配下にあるオアシス国家（高昌国）に穀物等の調達のために派遣された使節でもあった。中には突厥から降嫁された公主付きの達干で、高昌国になかば常駐していたような達干も存在していた〔荒川正晴 2010、81-82頁〕。とすれば、本墓誌の史達干もそのような職掌であり、西突厥の支配下にあった小規模なオアシス都市に駐在した突厥人、あるいはソグド系の小さな都市のソグド人で、西突厥の可汗から達干をあたえ

られていたのかもしれない。それが「本蕃城主」という表現で伝えられたと考えることができる。

3.3 「史曰夙に玉関に使いし、金塞に作鎮す」の解釈

以上のような考察を加えた時、必然的に父の史日は西突厥から唐朝へ、あるいは朝貢として、あるいは帰属する意思をもってやって来た者と解するのが自然だろう。史多の父である史日の活動時期は隋末から唐初と考えられるが、墓誌に「父の日、夙に玉関に使いし、金塞に作鎮せらる。乃ち礼して長子を遣りて削衽して来庭せしむ。公、之れ是なり。公至るや、皇上の其の誠款を嘉するを自て、特に拝して中郎将（正四品下）を授けらる」と記されていることをふまえるならば、史日の来朝時、「長子」すなわち史多を伴ったわけであるから、史日の来朝時期は、史多がある程度成長した後のことと考えられる。すなわち、貞観年間（627-649）、さらにいえばその半ば頃と推測すれば、史多も十五歳前後で来朝し、唐朝の質子になったことになる。

周知のごとく、唐の太宗が貞観四（630）年にモンゴリアの東突厥を滅ぼすと、その影響は周辺に及び、東突厥の西に位置していた伊吾にあったソグド人聚落の首長の石萬年が唐へ帰順してきた。唐はここに伊州を置き、ここを拠点にさらに西方への進出を図る。このころ、西突厥の最盛期は過ぎており、中には唐朝と通じ合う勢力がいた。史日もそういった一人であったと考えることができ、その子の史多を質子として入朝させたと解釈できるのである。

おわりに

以上の考察の結果、史多は、西域の交易ルート上にあったソグド人植民聚落を拠点とし、交易活動に従事していたソグド人に出自を求めることは難しく、結論をいえば、西突厥支配下にあった小規模なオアシス都市に派遣された突厥人、もしくはその都市のソグド人首領で突厥の文化を大きく受けた者の後裔であるということになる。

また、福島は「ソグド人植民聚落を拠点とし、交易活動に従事していたソグド人」の後裔が、唐後半期に武人として活動した可能性を提唱したが、少なくとも史多は開元六（718）年に101歳で亡くなっていることから、その活動を20歳から60歳と仮定した場合、太宗の貞観年間半ばから高宗の儀鳳年間の頃となり、唐後半期の武人の事例としては、不適當といえることができる。

では、唐後半期に見られるソグド系武人は、筆者がかつて提唱したソグド系突厥が主流となるのであろうか？この問題については、まだ十分な考察をすることができず、以下の3点の墓誌を紹介するとともに、将来の課題として残したい。

文献一覧

小野川秀美 1942 「河曲六胡州の沿革」『東亞人文学報』1-4、pp. 193-226.

森部豊 2010 『ソグド人の東方活動と東ユーラシア世界の歴史的展開』関西大学出版部

- 編 2014 『ソグド人と東ユーラシアの文化交渉』 勉誠出版
- 山下将司 2004 「新出土史料より見た北朝末・唐初間ソグド人の存在形態——固原出土史氏墓誌を中心に」『唐代史研究』 7、pp. 60-77.
- 2005 「隋・唐初の河西ソグド人軍団——天理図書館蔵『文館詞林』「安修仁墓碑銘」残巻をめぐって」『東方学』 1106、pp. 5-78.
- 2011 「北朝時代後期における長安政権とソグド人——西安出土「北周・康業墓誌」の考察」、森安孝夫編『ソグドからウイグルへ』、汲古書院、pp. 113-140.
- 2012 「唐の太原拳兵と山西ソグド軍府——「唐・曹怡墓誌」を手がかりに」『東洋学報』 93-4、pp. 397-425.

趙振華 2009 「唐代粟特人史多墓誌初探」『湖南科技学院学報』 30-11、pp. 79-82+plate.

毛陽光 2006 「両方唐代史姓墓誌考略」『文博』 2006-2、pp. 82-85.

Pulleyblank, Edwin G. 1952 "A Sogdian Colony in Inner Mongolia", *T'oung Pao*, 41, pp. 317-356.

【補記】 本稿の再校ゲラの段階で、鈴木宏節「トルコ系遊牧民の台頭」（岩波講座世界歴史 6 『中華世界の再編とユーラシア東部 4～8 世紀』、岩波書店、2022 年）を入手した。この中で、鈴木は「タルカン」について詳しく分析を加えているが、残念ながら、この成果を本稿では反映できなかった。今後の課題としたい。

【謝辞】 本稿作成において、京都大学名誉教授の吉田豊氏から「史多北勒」のトルコ語名に関し、多くの教示をいただきました。ここに謝意を表します。